

「信濃大町における国際芸術祭について」

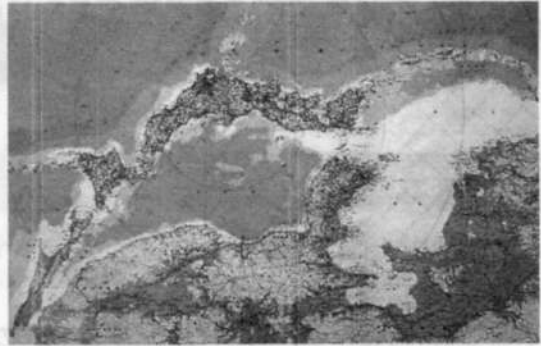
信濃大町 食とアートの廻廊
実行委員会事務局
2015年1月発行

実行委員長あいさつ

- ・大町市で行う芸術祭「食とアートの廻廊」では、大町の自然の美しさや豊かさに気づくこと、地域の誇りとして高めていくことが大切だ。
芸術は日常生活から遠いもののように感じるが、人々の営みの中に文化があり、そこから芸術となりえる活動がある。
当市でも市や県の補助金を活用して、芸術文化活動をしている市民がいて、食とアートの廻廊のような活動もはじまっている。
地域創生、地域に活力を生み出す、地域の魅力を高めるために、そういった活動を軸にがんばっていききたい。
- ・なじみの薄い現代アートという分野であるが、まだ方向性も決まっていない状況だ。
多くの皆さんに参加・協力していただくことによって成功につなげたい。
- ・大きな海に船出するようなことで、どんな荒波が待っているかわからないけれど海図もできていない。
市民と一緒に海図を作っていこう。羅針盤もないけれど、案内してくれる北川フラムさんがいる。大きな手掛かりとなる。
- ・フラム氏は、「大町市民のみなさんが本気を出さないことには、この芸術祭の成功は難しい。
そのため、市民の皆さんと一緒に勉強する機会を作っていきたい」言っている。
- ・多くの市民に参加してもらうことが芸術祭の成功につながる。今日をスタートとして、なお一層市民に力添えをお願いしたい。

北川フラム氏

- ・今の日本全体がうまくいっているわけではない。日本の社会が希望を見出すことができるのは地域の力だ。
地域がそれぞれ、自らの力を確認してやっていかないと駄目だという認識で地域創生が注目されている。
- ・日本は世界でも力のある国と言われた時期が長かったが、行ってみたい国のランクでは30位以下。
インバウンドに力を入れだしたら2000万人の訪日客を確保することも可能になった。
日本のいろいろな魅力を再発見していく必要がある。
- ・大町で2017年に開催する芸術祭で何を考えながら実施するのかを話したい。
- ・2000年から新潟県十日町、日本で一番雪が多い農業地域で芸術祭を手伝って来た。
関わってから20年がたち、一夏で数十万人の方が訪れている。
来年3月から始まる瀬戸内芸術祭にも関わっており、小豆島以外にも、ハンセン病で隔離された島や、産業廃棄物の島等で100日間に100万人近い人が来訪している。
- ・現代美術を中心とした芸術祭だが、新潟では里山の農風景や豪雪、そこに住むという事のきびしさや現実、すごさ、そこに息づく生活文化を垣間見ることでもできるし、瀬戸内では島での活動に独特なものがあることを発見できる。
- ・10年位前から都市が住む場所ではなくなってきたと考える人が多くなった。
それ以前は東京がよくなれば良いと考えられていたが、今では大阪の力がなくなり、東京の衰退も懸念されている。
以前は都市が儲かり、それが地方に還元されれば良いという考え方があった。
都市には興奮や刺激、大量の情報が集まり、変化があるが、実際にはそんなに面白いものではない。
情報に追われ、人間的な生活や活動ができないことに皆が気付き始めている。
- ・都市住民は、物見遊山での地方への旅行ではなく、第二の故郷を地方に求めている人が現在増えている。
自分の故郷以外で理想とする故郷をさがしている人がたくさんいる。
- ・日本の人口は1億3000万人くらいだが、減少傾向にあり、急激な人口減少は町や集落の機能の衰退につながる
これをどうするかが各地域の大きな課題である。



- ・美術というのは、この地域と都市の交流であり、五感をつかって心豊かに生きるという事は都市ではできない。どうやって地域と都市がうまく関係しながらやっていけるか、地域と都市がキャッチボールを行い、それぞれが得意な部分を生かしていくことが理想であり、地域への定住も大きなテーマだ。魅力的な地域の展望がないと、地域の魅力が発揮できない。子供がいなければ地域に溶け込むことが難しいが、外から来た人をもてなしてくれるという土壌があるのかも重要な鍵となっている。
- ・この場所はどのような場所で、どのような気候であって、そこに住む人が生活や文化を営んできたことを理解し誇りに思うことも重要なことだ。
- ・今、美術ははっきりと変わってきた。地球環境が危なくなってきた、人の生き方、自然とのかかわり方や文明とのかかわり方を表すものようになってきている。現代美術は、地球そのものが危なくなっている今「それを一番きちんと理解するためのアート」が求められている。
- ・美術はこの10年で大幅に変容してきている。新潟や瀬戸内でやっている美術の動きは、日本から始まっているのではないかと大きな話題になっている。イギリスでは考古学との関連で、日本のアートに注目が集まっている。自然と人はどのようにかかわり、共に生きてきたかということへの関心から、日本の試みに興味を持っているといわれている。日本における芸術祭というのは、初期のユートピアを目指しているのではないかと解釈がされていて、美術を通じて、多勢で関わることや、互いが弱い部分を補い合うことが注目されている。
- ・大町というのは、食や地域づくりなど、人口に比して色々な取り組みがある。大町という地域で活動している者同士が、連携して大町の魅力を発信することを、美術を中心にやっていければいい。ただ、日本人は極めて排他的な傾向があり、人の悲しみは一緒になって悲しむが、喜びは共有できない性格的なものがあるので、どう面白くしていくかが大きな課題だ。
- ・地球上の人間すべては、一人の人間から始まっている。そこからあらゆる地域に移動し、様々な土地、気候によって文化が育まれた。そこが魅力的である。色々な海外の作家や、日本の作家が大町でなにかをやるという事は、その魅力を浮き彫りにする作業だ。大町市民、長野県民、日本国民という分け方があるが、そういう分け方でなく、それぞれの風土に対してどのように生きてきたかということを明らかにすることが非常に重要だ。
- ・長野県は、戦国時代に沢山の武将がいたので、まとまりが悪いがそれぞれの地域が非常に特色をもっている。地域ごとの特色が色濃残る県だ。だからこそ「場所」がものを作ってきたこと、培ってきたことを大切にしていくことが重要。現在残っている地域の活動も、そこに起因している。
- ・大町についても、地球規模で考えなくてはいけない。日本はユーラシア大陸に対して太平洋に面した窓口。大町は中核で日本列島の分岐点。地殻、土壌、地質、天候的な特性が強くなる。その地域で扇状地など、特徴的な環境がある。
- ・十日町は6市町村が合併し効率化、情報化、一極集中を図ったが、もともと200以上の集落があり、豪雪地帯だということもあり、それぞれが団結して生きてきた。それぞれの地域や集落が他の集落とどのようにして関わりを持って繋がっていくのかという課題がある。越後妻有は20年かけて各々がやってきた事がようやく繋がってきた。

以下作品介绍



- ・信濃川は昔は蛇行していた、その蛇行していた後を、5mおきにポールを立ててみせることにより、私たちがどのような場所に生きていたかを明らかにした作品。ポールに旗を立てたのは地元のお百姓さんであり、最初は皆反対したけれど、段々参加してくれた。

- ・13台の除雪車でのバレーは、平均積雪年3-7mの場所で、この地域を支えている除雪労働者のすごさにみんなが気づいて、暖かい拍手があった。

みなさんが考える美術とは違うかもしれないが私の考える美術はそういうものだ。



- ・LEDで花火を彩るということ。棚田、500年前に流れてきた一向宗の門徒が、逃れて山の上で、豪雪地に住む必要があり、そこに棚田の起源がある。
- ・2011年長野県北部地震の影響を受け、十日町では土石流のモニュメントを作った。こうした厳しい山の中の立地では、土木工事そのものがアートとなる。



- ・また、人口の減少により空き家や廃校になる場所が多く出てくるが、それを壊すことはなかなか厳しい。そこにあるものを使えるようにするという事で、アブラモビッチの夢の家など、普通ならだれも来ない場所に人が来て、色々なつながりができてくる。

- ・うぶすなの家は、中越大震災の時にガタがきて、その時に日本を代表する焼き物の名人たちがその場所の改修を手伝った。根曲り杉の壁、築100年の古い工法の家をレストランとした。大変人気がある。地元のお母さんと相談してレストランを創っただけだけれど、最高傑作の美術だ。



- ・廃校を利用した作品は誰もいないのに子供たちのざわめきが聞こえ、その集落で子供たちを見守った人たちの気持ちが伝わる素晴らしい作品。都市ではなく地域でなければできないアートであり、子供たちは勿論、期待を託して育てた親たちの気持ちは、田舎でなければ為しえないものだと思う。

●芸術祭を開催している地域について、住民の意識の変化は？

⇒いまだに嫌悪感を示す人々もいるが、アンケートを取ると新潟も瀬戸内も8割以上が「やって面白かった」という回答。知らない人が来るというのは面白いことで、色々大変なこともあります。とにかくお年寄りが元気になったと思う。若い来訪者については、その地域のルールを守ることも呼び掛けている。

●大地の芸術祭を見てきましたが、本当に自然に対して現代アートは必要？

1回しか使われていない舞台もあるとか。お金がかかりすぎているのでは？

本当にその土地の人たちのことを考えて作られたものなのか？

⇒費用対効果について言えば、良いものだから残されている。決して一回の使い捨てのものではない。

東屋の予算で製作した能舞台で、能の講演は1回だが、年間を通じて地元で使っている行事はかなり多い。

●大町の魅力についてどう考えますか？

⇒水の資源・文化にまず魅力を感じる。(水路、家の下を流れている水、湖)

廻廊という名前もあるように、集落の中腹を周りながら見ていくパノラマは圧倒的。景色が素晴らしい。

●招聘アーティストへの経費・招聘アーティストの予算を公表できない理由は？

公募やコンペをした経歴はあるか？

⇒なるべく若いアーティストに加わってもらうため、公募は行っている。

費用に関して、アーティスト経費を総額についてはお話できるが、それぞれのアーティストのギャラは公表できない。

芸術祭ではかなり安く作品を作っていることを公表してしまうと、その後のアーティストの仕事に支障が出てしまうため。

●芸術祭の主役は誰？

⇒一般的にいうとアーティスト。影の主役は地元だと思う。

●税金がかかりすぎている。オリンピックが来ているようなものでは？

⇒オリンピックとは全く別物。アーティストがきて、この土地の捉え方を考えるということ。

病院、学校の建設費用が他に比べて高いとはいえないように、目的がまったく別のものを比較しても仕方がない。

食に関していえば、地域の人が主役だし、この地域を一番よく知っている人が作る食事は世界一だと思う。

●この芸術祭は、市民が一丸となった協力が必要であることは理解するが、今後のビジョン、情報は、市民に伝わっていない。

税金を使うイベントである以上、情報は開示してほしい。

また、原始感覚美術祭など、地元の芸術団体の活動を尊重すべき。

市民が芸術祭に熱い思いをもつには、先を見越した展望や個々の参加の仕方を市民全員に見せてほしい。

このほか、アンケート等でも

説明不足である、お金の流れが不透明である、外部に丸投げではなく地元でできないか、など
たくさんのご意見ご質問をいただいています。

ご意見を受けて、事務局でも検討を重ねておりますが、

同封チラシのとおり、1月16日に開催されます「信濃大町における芸術祭を語る会」の中でも、
意見交換の場を設けます。

引き続き、関心を寄せていただき、大町の未来を語っていただければと思いますので、
よろしくお願いたします。